

タイトル：2021 年度 教育セミナー（第 17 回）

日時：2021 年 9 月 16 日（木）～19 日（日）

オンライン開催

「オスマン史とクルド史の交わる場所—16～17 世紀のアナトリア南東部」

齋藤 久美子（聖心女子大学）

本講義では、報告者の研究対象地域であるアナトリア南東部の地理的概要の説明の後、史料紹介を交えつつ、これまでの研究を概観し、最後に写真を利用してアナトリア南東部を紹介した。

アナトリア南東部は、現在のトルコ共和国の南東部を指し、イラン・イラク・シリアと国境を接している。同地域は大きく北の山岳部と南の平野部に分けられる。もともとアルメニア人が多く住む地域であったが、11 世紀から 12 世紀にかけてクルド系部族集団が山岳地帯に侵入を開始すると、交易路上にある町を本拠地として一定の地域を支配するようになった。14 世紀にはクルド系部族連合を率いた複数のクルド系領主の領地が点在した。

16 世紀以降、アナトリア南東部の支配をめぐる激しく争ったのがオスマン朝とサファヴィー朝であった。16 世紀半ばまでにアナトリア南東部はオスマン朝により征服され、その結果、クルド系領主の領地もオスマン朝の領土に入った。征服後、オスマン朝はアナトリア南東部を緩衝地帯として機能させることでサファヴィー朝の直接の影響を避けるとともに、クルド系領主たちにはサファヴィー朝にかんする諜報活動も期待した。

以上のようなことが背景となって、オスマン朝のクルド政策が決定された。例えば、オスマン朝では県知事は在地化防止のため数年で罷免されるのが原則であったが、クルド系領主たちが県知事となったクルド系諸県には県知事の世襲が認められた。こうした特権は 17 世紀初頭にかけてじょじょに確定していった。また、ディルリク制の導入を例にオスマン朝のクルド政策について見てみると、以下のようなことが指摘できる。オスマン朝の軍隊は中央と地方の軍人から構成されたが、地方には地方行政組織と同じヒエラルヒーにそった軍人（騎兵）がいて、遠征時には在地騎兵は郷単位や県単位の司令官のもとに参集し、さらに県知事や州総督の指揮下に出征することになっていた。在地騎兵から州総督にいたるまで地方の軍人に俸給として与えられたのが「徴税権」で、これをディルリクと言った。クルド系諸県におけるディルリク制の導入に際して、オスマン朝はクルド系領主とその関係者がそれまで保有していた「徴税権」のような権利をそのままディルリクという言葉におきかえて追認し、原則に反してディルリクの世襲を認めるなど、クルド系領主とその配下の部族集団の既得権に配慮を示した。「オスマン支配」の標準的なモデルとして、オスマン朝が征服地の慣習や秩序を部分的に残しつつ体制内に統合したことが知られているが、ここから、名前は同じでも内容が画一的でない制度が存在したことが予想される。事実、アナトリア南東部の事例からも、オスマン朝が画一的なディルリク制を施行する意図はなかったとすることができる。